

「とらわれ」の限界状況における人間の存在について

— 収容所体験の内側と外側の視点から —

京都大学大学院教育学研究科

修士課程 2 回生 三 田 桂 子

Captive: The existence of human beings in the limit situation

The perspectives from inside and outside of the concentration camp experience

MITA, Keiko

キーワード：強制収容所，フランクル，アガンベン

Key Words：Concentration camp, Frankl, V.E., Agamben, G.

1. はじめに

「とらわれ」とは、自由を奪われたり、幽閉されたり、伝統や観念に拘束されることを意味し、外的環境、身体反応、社会的相互関係に至るまで複数の層にまたがって負の体験を表現している。そして、心理臨床領域では様々な意味が内包され表出され得る。例えば、自らの境遇や症状への「とらわれ」の苦しみが語られたり、その臨床像について囚人、奴隷、被虐待者といった「とらわれ」の人物像のメタファーとして臨床家によって記述されることもあるだろう。心的外傷障害研究の先駆者であるアメリカの精神科医 Herman, J.L. (1992 / 1999) は、実際の物質的な障壁に囲まれる政治的監禁状態から、目に見えない障壁に囲まれる家庭の牢獄までを地続きの「監禁状態」と位置づけ、捕囚的な生活による心理的損傷について、強制収容者の生還者の証言と重ね合わせ、その怖ろしさを詳述している。このように「とらわれ」という表現は、客観的な事実性の領域から内的体験の領域まで複雑に絡み合う内容が包含されており、心理臨床において重要な意味をもつといえるだろう。

そこで、多様な層をもつ「とらわれ」という現象について、本論では「とらわれ」のひとつの極限的な状況としてユダヤ人絶滅政策（以下ショアーⁱと記す）に着目する。ショアーという歴史的事実は、限界状況に位置づけられる。限界状況とは、ヤスパース (Jaspers, K.T., 1950 / 1954) が実存哲学の基礎概念として提唱した用語で、人間の意志や努力によっても逃れることのできない状況のことであり、死・苦・病・争・責・由来・偶然など、日常を粉碎してしまう状況のことを示す。ショアーの背景には、人間を労働の単なる手段とし、徹底的に利用し、生産的でなくなった生命を生きる価値が無いとみなし、あっさり殺してしまうことを合理的とする考えがあり、経済秩序の変化と深く結びついている (Frankl, V.E., 1947 / 1993) と考えられ、現代を生きる私たちの人間観や生活感の蔭に潜んでいる問題も含んでいる。

ゆえに、本論では、強制収容所に捕囚された人々の存在について考え、極限的な状況における人間の可能性と暴力性を見つめてゆきたい。そのために、強制収容の体験の内側からの視点をもつ心理学者 فرانクル (Frankl, V.E.) と、体験の外側から哲学的に思索したアガンベン (Agamben, G.) の著書を取りあげる。まず、フランクルと同時代を生きたユダヤ系の臨床家の動向と時代背景を概観した上で、両者のショアーに関する考察と強制収容所の生還者の証言を辿って、検討を進めてゆく。

2. 方法の検討

以下の2つの側面から「とらわれ」の限界状況における人間の存在を検討する。

(1) フランクルと同時代を生きたユダヤ系の臨床家たちの選択と時代背景

ショアーに関連する1930～40年代の時代背景と共に、当時、欧州諸国で生活及び活動をしていたユダヤ系の臨床家達の動向について事実関係を概観し、フランクルの立場を確認する。

(2) 限界状況における人間の存在について

強制収容所から生還した僅かな人々の中で、一部は沈黙を選び、少数の人々は証言を残している。「通常の囚人」の立場で収容所の内側から心理学的な考察を行ったフランクル、及び、生還者の証言に基づき体験の外側から考察を行ったアガンベンの以下の著作に焦点をあてる。アガンベンは、直接的にショアーを体験した者ではないが、訓練された哲学的な思考のプロセスによって、限界状況における人間の存在の質について慎重に論考していることから、本論のテーマを検討する上での対象に据えた。体験の内側と外側という両者の視点の違いを念頭に置き、事実性 (factuality)・現実性 (reality)・アクチュアリティ (actuality) の3つの領域に分けて検討する。

尚、両者の著作からの引用については、以下の通りに略記号と頁数を示す。

1. YO: 夜と霧—ドイツ強制収容所の体験記録 Frankl, V.E. (1947, 霜山訳 1956)
2. SO: それでも人生にイエスと言う Frankl, V.E. (1974, 山田・松田訳 1993)
3. SI: 識られざる神 Frankl, V.E. (1948, 1951, 佐野・木村訳 2002)
4. AU: アウシュヴィッツの残りのもの—アルシーヴと証人 Agamben, G. (1998, 上村・廣石訳 2001)

3. 執筆の姿勢について

ショアーという極限の歴史的事件について、戦後世代の日本人の筆者が、第三者の立場から論じる事には多くの危険性が孕んでいる。それは、筆者が生活する現代の時代感覚で理解できるものでは到底ないからである。フランクルは、飢えている者に生じる激しい内心の葛藤や意志の闘いは、体験したことのない人には想像もつかず (YO, p.114)、個々の人間の生命の徹底的な無価値は、体験した人だけが理解し得る (YO, p.145) と語る。その意味を心に留めながら、木村 (2005) が『関係としての自己』において、Agamben, G (1998/ 2001) のアウシュヴィッツ論から「あいだ」を考察する際、自身の経験範囲と想像力をはるかに超えている事態に対する非難や断罪を避ける慎重な態度をもって思索し、限界状況で見えてくるものが普遍人間的であり、そのことから精神病理学の領域への重要な示唆を感受しよう

とする姿勢で論考していることを頼りにして、本論を進めてゆく。

4. フランクルと同時代のユダヤ系の臨床家たちの選択と時代背景

フランクルと同時代を生きたユダヤ系の臨床家たちの動向を概観するために、1933 年から 1945 年までのショアーに関わる出来事や社会状況の年表を表 1. に示す。

表 1. 時代背景と臨床家の動向に関する年表

年	臨床家 [年齢(数え年)]	亡命、強制収容について	ナチス・ドイツの政策、社会状況
1933年	Perls, F.S. [40] Erikson, E.H. [31] Klopper, B. [33]	・ドイツ⇒オランダ⇒南アフリカ⇒1946年にアメリカへ亡命 ・ウィーン⇒デンマークを経由、アメリカへ亡命 ・ベルリン⇒スイスに9ヵ月移住、翌年アメリカへ亡命	1/30 ヒトラー政権成立 ユダヤ商店ボイコットが始まる
1934年	Fromm, E. [34]	・ドイツ⇒ジュネーヴを経由しアメリカへ亡命	2/5 ユダヤ人学生を医師歯科医試験から排除
1935年	Fromm-Reichmann, F. [46] Adler, A. [65]	・ドイツ⇒アメリカへ亡命 ・ウィーン⇒アメリカへ亡命	9/15 ニュルンベルク人種諸法公布 「帝国市民法」および「ドイツ人の血と名誉を守るための法」
1938年	Freud, S. [82]とFreud, A. [43] Hartmann, H. [44] Spitz, R. [51] Mahler, M.S. [42] Balint, M. [43] Bettelheim, B. [35]	・6月 ウィーン⇒パリを経由しイギリスへ亡命 ・パリ⇒アメリカ(NY)へ亡命 ・パリ⇒アメリカ(NY)へ亡命 ・ハンガリー⇒イギリスを経由しアメリカへ亡命 ・ハンガリー⇒ロンドンに移住し、イギリスに亡命 ・強制収容に収容される 翌4月 特赦による解放、 12月にアメリカへ亡命	3/12 オーストリア併合 7/23 ユダヤ人に特別の身分証明書交付 7/25 ユダヤ人医師、ユダヤ人患者のみ診察可 9/27 ユダヤ人弁護士の営業禁止 10/5 ユダヤ人の旅券没収 11/9 帝国水晶の夜
1939年	Kohut, H. [25] Kernberg, O.F. [11]	・ウィーン⇒イギリスへ亡命、1940 年シカゴ移住 ・家族と共にウィーン⇒チリへ亡命、1959年にアメリカ移住	3月 ドイツ軍、チェコスロバキアに進駐 9/1 ドイツ軍、ポーランドに侵入 第二次世界大戦が始まる
1941年			10月 ドイツのユダヤ人強制移送、国外移住禁止
1942年	Frankl, V.E. [37]	・9月 家族と共にテレージエンシュタット強制収容所に収容、 1944年10月アウシュヴィッツへ移送、3日後テュルクハイム へ移送、1945年4月にアメリカ軍により解放	1/20 ヴァンゼー会議 絶滅政策実施へ ポーランド、ドイツ、フランス、オランダのユダヤ人を アウシュヴィッツ絶滅収容所へ移送
1945年			4/29 米軍、ダッハウを解放 4/30 ヒトラー自殺 5/7～9 ドイツ軍、無条件降伏

・臨床家に関する情報は、心理臨床大事典〔改訂版〕(2004)より

・ナチス・ドイツの政策と社会状況に関する情報は、「SHOAH」(Lanzmann, C.,(監督) 1985/1997)の関連年表(佐藤)より

1933 年 1 月、ナチス政権が成立し、ドイツではユダヤ商店のボイコットが始まった。この年、パールズはオランダを経由し南アフリカへ逃れ、エリクソンはウィーンを脱ち、母の祖国であるデンマーク国籍の取得を目指す難航し、その後、アメリカへ亡命、ベルリンのクロッパはユングを頼り、9 ヶ月間スイスに移住した後、アメリカへ亡命した。翌 1934 年 2 月、ユダヤ人学生が医師歯科医試験から排除されるようになる。ドイツのフロムは、ジュネーヴ経由でアメリカへ、元妻のフロム＝ライヒマンは、翌 1935 年にパレスチナ経由でアメリカへ亡命し、ウィーンのアドラーはアメリカへ発った。1938 年 3 月、ナチス・ドイツによってオーストリアが併合され、ユダヤ人の強制収容が始まる。同年 6 月、文化人達の働きがけもあり、フロイト親子はパリ経由でイギリスへ亡命を果たした。7 月以降、ユダヤ人への圧制は更に強まり、特別身分証明書の交付、ユダヤ人医師による診察はユダヤ人に限定され、ユダヤ人弁護士は営業禁止となり、10 月に旅券没収となる。同年 11 月 9 日夜から 10 日未明にかけ、帝国水晶の夜(クリスタル・ナハト)と呼ばれる反ユダヤ主義の大暴動が起こり、ドイツ各地のユダヤ系住宅地域が襲撃され、シナゴーク、商店や企業などが破壊された。その暴動はオーストリアやズデーデン地方(現在のチェコ共和国の北部、ドイツとの国境付近の地域)にも広がり、ユダヤ系の人々の生活空間が

荒廃する。この年多くの臨床家が亡命を決断し、パリのハルトマン、スピッツ、ハンガリーのマーラーはアメリカへ、バリントはイギリスへ渡った。ウィーンのベッテルハイムは捕囚されたが、翌年 4 月 20 日にヒトラー誕生日の特赦により解放され、12 月にアメリカへ亡命した。このように不穏な社会状況下、コフートはウィーン大学医学部の学位を取得した翌 1939 年にイギリスに亡命した後、知人を頼ってシカゴへ移住を果たす。当時 10 代であったカーンバーグは、家族と共にチリへ亡命した後、31 歳の時にアメリカへ移住した。

このように心理臨床の礎を築いたユダヤ系の臨床家たちは、ショアーによって故郷や活動拠点から亡命し、縁故を頼って北米、南米、英国、アフリカ等に渡り、新たな地で根をはり、臨床活動を展開した。その中で、家族と共にウィーンに残ることを決断し、収容所の体験を生き抜いた精神科医フランクルの存在は一線を画していると言える。

5. 限界状況における人間の存在について

限界状況の下で、人々がどのような態度・姿勢で生き、あるいは、死に至っていったのか、フランクとアガンベン¹⁾の著述の内容について、事実性(factuality)・現実性(reality)・アクチュアリティ(actuality)の 3 つの領域から検討を行う。

(1) 事実性(factuality)・現実性(reality)・アクチュアリティ(actuality)に着目する理由

限界状況における人間の存在について検討するにあたり、アイデンティティを研究したエリクソン(Erikson, E.H.)の視点と、人間の自己の在り方を緻密に考察する木村敏²⁾の視点を足掛かりにする。

まず、エリクソンは、アメリカ開拓時代のジェファソン大統領と国民のアイデンティティを分析するにあたり、現実について事実性(factuality)・現実性(reality)・アクチュアリティ(actuality)の 3 つの側面に区分した(Erikson, E.H. 1974 / 1979)。西平(1993)は、『エリクソンの人間学』において、アイデンティティ理論の生成過程を辿り、事実性とアクチュアリティが結合する領域で現実性が生じる視点を提起している。また、精神病理学の観点から木村(2005)は、人間の自己について意識的表象以前の生命的な関わりや集団感覚としての潜在態(virtuality³⁾)、個体感覚を認識する実在性(reality)、なまなましい実感を伴う現前意識としての現勢態(actuality)の 3 つの側面から、『関係としての自己』を考察した。集団と自己のあいだの現象を捉えようとする木村の視点と、集団と個人の相互作用に注目するエリクソンの視点を重ね、人間が生きる姿を多層的に検討するために、以下の 3 つの領域を指定した。

- ・ **事実性(factuality)** とは、歴史的事実の事であり、事実や記録によって論理的に示される領域である
- ・ **現実性(reality)** とは、外界の対象を認識し、自らの存在感覚が経験として確認される事実性とアクチュアリティが結合する領域である
- ・ **アクチュアリティ(actuality)** とは、なまなましい実感を伴い、唯一の自己であるという感覚が、一瞬のひらめきとして意識され、實際上、真実であると感じられる「現前意識」が現れ、新たな相互交流が生じる領域である

(2) 事実性(factuality)からの検討

・フランクルの強制収容体験について

フランクルの強制収容体験に関する事実関係を概観する。フランクルは1905年にウィーンに生まれ、ウィーン大学在学中にフロイト、アドラーに師事し、精神医学者として活動した。1938年3月にナチス・ドイツにオーストリアが併合され、ユダヤ人へ圧力がかかる中、1941年にウィーンで結婚した。翌年9月、ユダヤ人である事を理由に両親と妻を含めた一家全員が捕囚され、テレージエンシュタットに移送され、父は同収容所で死亡する。1944年にアウシュヴィッツへ移送され、母と妻はその地で死亡した。フランクルはアウシュヴィッツ移送の3日後にバイエルンのダッハウ強制収容所の支所テュルクハイムに移送された。最後の数週間を除いて医師として活動する立場にはなく、119104という番号の「通常の」囚人として鉄道建設や道路構築などの土木作業の強制労働を強いられた。その収容生活は、1945年4月にアメリカ軍によって解放されるまで31カ月間に及ぶ。解放後の1947年、自身の収容体験について、「平均的な囚人の心」(YO, p.75)の記録として『夜と霧』を、講演の収録として『それでも人生にイエスという』を刊行した。

・アガンベンの立場、態度について

アガンベンは、1942年ローマ生まれのイタリア人の哲学者であり、直接的にショアーを体験した人物ではない。収容所から生還したプリモ・レーヴィⁱⁱⁱの証言を中心にしながら複数の生還者の証言を取りあげ、死の内側から語ることはできない証言の欠落を凝視する方途を選択し、「証言に対する終わりのない注釈」(AU, p.10)としてアウシュヴィッツの論考を深めた。アウシュヴィッツは永遠に理解不可能であると拙速に納得しようとしたり、安直に神聖化したりすることによって理解を拒否する態度を厳しく批判する。生き残って証言する者たちにとって、かけがいのない真実は、現実的諸要素の構成によって還元されることはできず、事實的諸要素を必然的に逸脱しており(AU, p.9)、「事実と真実、確証と理解のあいだの不一致」(AU, p.9)に目を見開いてゆく態度を徹底した。

以上のように、フランクルは、「通常の」囚人として生き延びた者の立場から、収容所の内側から論考し、アガンベンは、第三者として収容所の外側から、哲学者の立場で証言を集め、証言の欠落を凝視する姿勢で論考を深めてゆく。次項では、両者の立場の違いを前提にして、現実性(reality)の側面から検討する。

(3) 現実性(reality)からの検討

フランクルは自分自身の内界と収容生活の観察を整理し、平均的な収容者の心理的变化を3段階に区別した。第一段階は、収容所に収容される段階であり、恐ろしい戦慄の中で感情が激動するショックを覚える(YO, p.99)。第二段階は、本来の収容生活の段階であり、無関心、無感覚、感情の鈍麻によって自己防衛をする(YO, p.110)。第三段階は、収容所からの解放の段階であり、突然の圧迫が除去されることにより心理的に危険に脅かされ、人間への不満と深い失望が日常生活から生じる(YO, pp.201-202)。第二段階の「本来の収容所生活」とは、極限状況が日常的なものになる場所であり、いつ解放されるのかわからない環境の中で、収容者の存在は「期限なき仮の状態」(YO, p.172)と定義される。そして、

収容者の存在は労働力という手段にされ、常に生命維持のための烈しい生存闘争におかれる状況で、幾つかの特徴によって分けられた。それは、個人の健康状態や身体の特徴、性格特性などによって、選抜や淘汰されるというかたちで生じていった。このような収容者の存在様式は、環境と個人との相互作用によって、自他ともに確認できる要素をもつことから、現実性（reality）の領域に位置づけられる。フランクフルとアガンベンの著述に基づき、収容者の存在様式を表 2. に示す。

表2. 収容者の存在様式

呼称	日本語訳	意味	参考資料
カポー (Kapo)	監督囚人	強度のサディストで最も残酷な人間が選抜され、悪意をもって普通の囚人を苦しめた人々で、ナチス親衛隊に同化し、協力した者	YO, p.76 YO, pp.193-194
ゾンダーコマンド (Sonderkommando)	特別労働班	ガス室と火葬場の運営を任されたグループ、収容者を処刑場に導き、死体の開口部に隠された貴重品を調べ、死体を燃やし、灰を片づけた人々	AU, pp.26-27
ムーゼルマン (Muselmann)	回教徒	生きる意志を破壊され、あらゆる希望、全ての生きる意味を失ったもの、証言の中では、「ミイラ人間」「歩く死体」「生ける屍」「非人間」「ゴルゴンを見た者」「底に触れた」者と語られることもある	AU, pp.51-69
Figuren	木偶(でく) 人形	強制収容所で死者の身体は、「遺体」や「死体」と呼ばれず、単に「木偶」や「人形」とモノ化して呼ばれた	AU, p.64
典型的な収容所囚人		自由と尊厳を放棄し、外的条件の単なる玩弄物となり、その法則性のいいりになってしまった人	YO, p.166 SO, p.129

フランクフルは、自らの体験を直視し得るような学的距離、客観的判断をなし得るにはあまりに僅かな距離しかもたない、という方法論的な困難を考慮しながら、外部の人間はあまりに遠くその体験の流れの外に立ち妥当な記述をなし得ず（YO, p.81）、「安全な外国に滞在していた人」が、英雄的、殉教的な態度を要求し、他人の軟弱さや卑屈さを非難することはたやすいこと（SI, p.139）、と痛烈に批判した。そして、自身を「通常の」囚人に位置づけ、サディスティックに苦しめたカポー（監督囚人）に対する憎しみを露わに示しつつ（YO, p.76, pp.193-194）、個別的なカポーとの人間性を交わすエピソードを記述して（YO, p.109, p.196）、例外の存在を重視した。『夜と霧』の中では、「ゾンダーコマンド（特別労働班）」という呼称を用いず、長期の囚人、あるいは「古い」囚人（YO, p.86, p.90）と婉曲的に触れられている。また、「ムーゼルマン」という呼称についても、一定の距離をとり、他の収容者が発話したセリフとして「ムーゼルマン」、「生ける屍」（AU, p.98, p.174）という呼称が登場するという間接的なかたちをとっている。フランクフルは、病囚の姿、一般的な失望や落胆が囚人を打ち負かし自己を放棄させる姿、生きることへの目的がなくなる姿、未来への希望やよりどころを失い、内的に崩壊する個々の姿を具体的に描写し、そのような在り方を「典型的な収容所囚人」の一部に含めている。フランクフルの述べる「典型的な収容所囚人」とは、強制収容所という環境の力に屈した人間の在り方を指し（YO, p.166）、ある身体的、心理的、社会的条件の単なる表現以上に、なんらかの形で内的な決断の結果の表れ（YO, p.165）、と位置づけた。ここでいう決断とは、突然決めなければならぬ決断であり、存在と非存在とに関する決断（YO, p.152）というかたちで迫られた。外部から強制された制限によって「体験の価値」や「創造の価値」を実現化する機会がなくなっても、いかなる態度をとるのか、という「態度の価値」を選択

する自由は最後まで残され (YO, p.168)、人間としての本当の自由は、囚人から取りあげることはできなかった (SO, p.128) と強調する。人間性を完全に失った者と定義される「ムーゼルマン」から、フランクは心理的な距離をとり、人間性をもって生きる側に軸足を置いたのではないだろうか。

一方のアガンベンは、フランクが距離を置いた「ムーゼルマン」をアウシュヴィッツの中心に据える。「ムーゼルマン」とは、回教徒 (イスラム教徒) を意味するドイツ語であるが、原義とは関係はなく、無条件に神の意志に服従する者という軽蔑をこめた歪曲の意味をもつ隠語としてアウシュヴィッツで広まったと考えられる (AU, pp.55-56)。「ムーゼルマン」は、限界状況下で、我が身に何が起きているのか認識できない「生きる屍」であり、人間であることを完全に放棄した者であり、死に至ったとしても、その身体は「Figuren (木偶・人形)」と呼ばれる物として扱われ、人間として死ぬことの尊厳を奪われた者のことを指す (AU, pp.51-69)。アガンベンは、レーヴィの証言を紐解きながら、「ムーゼルマン」こそが、収容所の「中枢」という生死を分かつ閾に存在し (AU, pp.65-66)、収容所で底に「触れた者」であり、本来の意味での「生きている者」として、なにも見ておらず、なにも知らず、語ることができない存在 (AU, p.69) でありながら、「完全な証人である」 (AU, p.108) という矛盾を孕むテーゼを「レーヴィのパラドックス」と呼び、その理解を深めてゆく。「ムーゼルマン」は、人間と「非—人間」のあいだの閾の存在を指し示し (AU, p.70)、あらゆる証言の欠落を刻み込む者で (AU, p.107)、定まった位置をもたず揺れ動き、生き残った者から断ち切ることはできない (AU, p.213)。生き残った者が、「ムーゼルマン」のために、話すことの不可能性から出発して話すのであれば、話す者であるわたしは、回教徒となり、話すことのできない者だったというパラドックスを立証することになる (AU, p.223)、という可能性を提示した。生き残った者たちが「ムーゼルマンの代わりに」、「非—人間の受託者」として証言する場の生成について、死の側から生の側へのはたらきがけ、相互性が発生する場が生じ得ることを「死」に軸足を置いたアクチュアリティととらえ、次項で検討する。

二者の視点を比較すると、フランクは、死と隣り合う限界状況の中で「生」の側に軸足を置き、人間性を手放さず、未来を重視して生き抜いた少数の者の立場から論考し、「ゾンダーコマンド」や「ムーゼルマン」という存在様式と心理的な距離をとったと考えられる。その背景には、フランクは発疹チブスに罹り病囚となった体験があるのではないだろうか。フランクの容態はくたばっているように見え、自身も死が近いことを実感し、発疹チブスが蔓延する収容所へ医師として派遣されることを、自分の死に意味をもつ決断として志願した際、静養を得ることができた (YO, p.141)。この状況を外側から見れば、「ムーゼルマン」と位置づけられる可能性があるだろう。しかし、フランクの死を覚悟した決断は、生の方向へと繋がっていった。外側からの観察によって「ムーゼルマン」のように見えることと、内的に「ムーゼルマン」になること、とのあいだには、根本的な断絶が横たわっていることが感じられる。

アガンベンは、体験の外側から思想哲学の視点をもち、「死」の内側に存在する「ムーゼルマン」を中心に据え、多数の死者たちの声にならない証言を感受しようと論考を進めていった。この両者の違いに注目して、フランクの論考を「生」に軸足を置いたアクチュアリティとして、アガンベンの論考を「死」に軸足を置いたアクチュアリティとして検討を進めてゆく。

（４）アクチュアリティ（actuality）からの検討

・「生」に軸足を置いたアクチュアリティ フランクルの論考から

前項で論じた収容者の存在様式について、「典型的な収容所囚人」に鑄直されない例としてフランクルが示した体験のエピソードを抜粋し、「生」に軸足を置いたアクチュアリティについて考えたい。

[エピソード 1] SS 隊員について (YO, p 195 よりまとめ)

解放後判明したことであるが、テュルクハイム収容所の親衛隊員のある司令は、自分のポケットから金を出し、町の薬局から囚人のための薬を買入れさせていた。この収容所の囚人代表は、自らも囚人であるが、時と所を問わずに囚人を殴った。だが、この司令は、一度でも「彼の」囚人に対して手をあげたことはなかった。人間の善意は、全部からみれば罪の重いグループにも見出され、善と悪の境界は入りまじっている。

[エピソード 2] カポーについて① (YO, p 196 よりまとめ)

ある日一人の労働監督（カポー）がそっとパンの小片を私（フランクル）にくれた。彼がそのパンを彼の朝食の配給から倅約してとっておいてくれたことを知っていた。物質的なものとしてのパンではなく、彼が私に与えた人間的なあるもの、人間的な言葉、人間的なまなざしに、涙が出るほど感動させられた。善と悪との合金としての人間的なもの、が見られた。

[エピソード 3] カポーについて② (YO, p109 よりまとめ)

私の労働グループのカポーは、彼の恋愛話と夫婦の軋轢の話を私が職業的な理解で聴き、心理治療的な忠告でよい印象を与えて以来、彼は気にかけてくれた。労働場で昼にスープが出たような場合、彼は杓子を深くいれて桶の底から豆を二、三粒すくい上げて入れてくれた。また、私に対してひどく怒っていた別の労働監督に、自分は私を「よい労働者」だと思っていると囁いてくれる市民的な勇氣すら持っていてくれた。私の生命が助かることがうまく行ったのだ。

SS 隊員、カポーとは、典型的には囚人を苦しめる立場にあった者であるが、彼らが「通常の」囚人であるフランクルと人間的な交流を交わしたエピソードには、限界状況下におかれ、互いの立場を超えたアクチュアリティが生じる瞬間が描かれていると言えるだろう。フランクルは、体験を通じたエピソードによって、表 2. に示したような単純化された「定型的なこれこれ」と規定するようなものの見方を断じて否定し (SI, p.123)、定型に繋ぎ留められるような運命的な規定を超えて、「非定型的」であろうと決断する姿 (SI, p.124) に「態度の価値」を見出してゆく。フランクルが、「態度の価値」は限界状況においても奪われることはない、と主張する背景には、強制収容体験を通じて、少数ながらも人間性を守り抜く人々の存在のアクチュアリティに触れる中で、確信が築かれていったのだろう。そして、その人間性とは、[エピソード 1]:「全部からみれば罪の重いグループにも見出され、善と悪の境界は入りまじって」、[エピソード 2]:「善と悪との合金としての人間的なもの」と述べられており、清濁が混じ

り合っている在り方で、その都度の決断の中に現れ出るものだと考えられる。

やがて、フランクルの実存思想は、良心の現象について帰納的に現象的に示す (SI, p.31) 方向へと進み、抽象性が高まってゆく。超越的な現象として「声をもつ」ことのできない「良心の声」(SI, p.63) によって、みずからを超越し、死すべき者であるという人間の限界を悟り (SI, p.151) ながら、内在性から外へ踏み出し、あるものを指向してゆく (SI, p.155) という実存的に生きる姿が描かれる。フランクルの語る「良心」は、「超越の声」、「意識されざる神」へと繋がり、決断の背後にある言語化されないなにかを感受して生きる在り方を示し、垂直軸の上方を指向する。

・「死」に軸足を置いたアクチュアリティ アガンベン論考から

アガンベンは、「ムーゼルマン」の存在を中心に置き、その証言の欠落を凝視して論考を進め、生き残った者たちが「ムーゼルマンの代わりに」、「非—人間の受託者」として証言する場が生成される可能性を提起した (AU, p.223)。「ムーゼルマンこそが完全な証人である」というレーヴィのパラドックスは、「ムーゼルマン」という非—人間、決して証言できない者が、真の証言者である、という意味と無意味を明示する。証言の主体は分裂し、分離と隔たりのうちにあり、分離と隔たりに還元しつくされることもできず (AU, p.204)、定まった位置をもたない閾として揺れ動く。固定した空間をもたず、「死」の側から発せられる声にならない質感を、生き残った者が感受し、固有の私を脱して語り始めることを、アガンベンは「脱主体化の主体」(AU, p.204) と呼ぶ。Erikson, E.H. (1974 / 1979) は、アイデンティティの生成過程を分析する上で、アクチュアリティについて「生き生きとした相互関係の新しい在り方」と、「生」の側からとらえた。「死」に軸足を置いた場合、死者たちの声にならぬ質感が、生きている者にはたらきがけ、両者のあいだに相互交流が生起するということから、「死」に軸足を置いたアクチュアリティととらえられるのではないだろうか。

以上、フランクルは、「生」に軸足を置いて、限界状況下においても、人間性が奪われることなく生き抜いた人々の姿を具体的なエピソードで示した。そして、典型的な存在様式に陥ることなく、「非定型」であろうとする決断を大切にし、その決断の背景に「良心」、「超越の声」、「意識されざる神」へと、言語化されない超越的存在を感受しようとする垂直軸の上方を指向していった。アガンベンは、垂直軸の下方を指向し、「死」の側から発せられる声にならない声を、生き残った者が感受する場の生成に意義を見出した。両者は、垂直軸の上方へ、下方へ、と対極を指向しながら、声にならないなにか、を感受しようとする姿勢に重なり合いがあるようである。

6. 考察

これまで、「とらわれ」の歴史的事実としてショアーを取りあげ、極限的な負の体験の中での人間存在について検討をしてきた。山田 (1993) はフランクルの実存思想の解説の中で「あらゆる生きる意味を奪われたかに見える強制収容所の状況は、目に見える鉄条網はなくてもそのまま現代の精神状況とも共通するところがある」(p.166) と述べ、無気力、無感動、無目的という意味を失った現代の多くの大学生の姿を例に挙げる。ショアーは過去の政治的事件ではなく、私たちの現代社会に広がる問題にも繋が

っているといえる。

本論では、限界状況における人間の存在について、フランクとアガンベン¹⁾の論考に焦点をあて、事実性 (factuality)・現実性 (reality)・アクチュアリティ (actuality) の 3 つの領域に分けて、検討してきた。「生」に軸足を置いたフランクの視点から、限界状況下においても人間性の表れは「態度の価値」として誰にも奪われることはない事が、自らの収容体験のエピソードから示された。そして、アガンベンは、フランクが心理的に距離をとった「ムーゼルマン」の存在を中心に据え、「死」の内側からムーゼルマンの声にならぬ証言が、生き残った者たちに感受されてゆく場の生成の可能性を示した。極限状況の真只中にあったフランクにとって、「死」の内側から見る視点は、苛酷な体験と距離が取れなくなる禁忌の領域であったのではないだろうか。アガンベンは、冷静かつ慎重に思索を進める訓練された能力を有する第三者の立場であるからこそ、「死」に軸足を置く視点をもちえたのではないだろうか。両者は論考を進める中で抽象性を高めてゆき、フランクは超越的存在を感受する垂直軸の上方向を指向し、アガンベンは死の内側という下方向を指向しながらも、両者ともに声にならないなにかを感受する人間の在り方に辿り着く。この重なり合いは、心理臨床において重要な接点ではないだろうか。木村 (2005) は、アガンベンが表題に示した「残りのもの」とは、「場のない場」、「空間より原初的な何か」であり、「あいだ」において「わたし」が生じる場であり、精神医学において、精神科医と患者の間で生じ繋いでゆくものと示唆した。

本論で見出したフランクとアガンベンの視点の違いと重なり合いを、体験の内側から生きるために上昇しようとするクライアント、体験の外側から下降しようとするセラピストの姿に重ね合わせることは乱暴な飛躍だろうか。「死」に晒されるような衝撃的な体験の内側から、声にならない質感が発せられているとしたら、生き残った「私」がそれを感受し、日常的な私を抜け出して語り出す行為が生成される場は、心理臨床の場の中で生起しているものなのではないだろうか。

本論では、フランクとアガンベンの著書を辿りながら、思弁的に論じたが、臨床実践と理論との生きた繋がりを探りながら、再考してゆくことを今後の課題としたい。

引用文献

- Agamben, G. (1998). *Quel che resta di Auschwitz. L'archivio e il testimone*. Torino. Bollati Boringhieri. 上村忠男・廣石正和 (訳) (2001). アウシュヴィッツの残りのもの—アルシーヴと証人. 月曜社.
- Erikson, E.H. (1974). *Dimensions of New Identity: The 1973 Jefferson Lectures in the Humanities*. W. W. Norton & Company Inc., New York. 五十嵐武士 (訳) (1979). 歴史のなかのアイデンティティ. みすず書房.
- Frankl, V.E. (1948). *Der Unbewusste Gott*. (1951) *Logos und Existenz*. Wien. Amandus Verlag. 佐野利勝・木村敏 (訳) (2002). フランク・セレクション 3 識られざる神. みすず書房.
- Frankl, V.E. (1947). *…Trotzdem Ja zum Leben sagen*. Wien. Frye, B.B. 山田邦男・松田美佳 (訳) (1993). それでも人生にイエスと言う. 春秋社.
- Frankl, V.E. (1947). *Ein Psycholog Erlebt. Das Konzentrationslager*. Wien. Verlag fur Jugend und Volk. 霜山徳爾 (訳) (1956). 夜と霧 — ドイツ強制収容所の体験記録. みすず書房.
- Herman, J.L. (1992). *Trauma and Recovery*. New York. HarperCollins Publishers. 中井久夫 (訳) (1999). 心的外傷と回復. みすず書房.
- Jaspers, K. (1953). *Einführung in die Philosophie*. Piper & Co., München. 草薙正夫 (訳) (1954). 哲学入門. 新潮社.
- 木村敏 (2005). 関係としての自己. みすず書房.

Lanzmann, C. (監督) (1985). SHOAH. 高橋武智 (訳) (1997). ショア. 日本ヘラルド映画.

西平直 (1993). エリクソンの人間学. 東京大学出版会.

氏原寛・亀口憲治・成田善弘・東山紘久・山中康裕 (編) (2004). 心理臨床大事典 [改訂版]. 培風館.

山田邦男 (1993). 解説 フランクルの実存思想. Frankl, V.E. (1947). ...Trotzdem Ja zum Leben sagen. Wien. Frye, B.B. 山田邦男・松田美佳 (訳) それでも人生にイエスと言う. pp.161-217. 春秋社.

i ショアー : Shoah ユダヤ教徒にとって大量虐殺を指す語であり、「壊滅、破局」を意味し、聖書では神の罰の観念を含んでいるが、あざけりは含まれない。一方、「ホロコースト」という語は、ラテン語の *holocaustum* [丸焼きの犠牲] が学術用語化したもので、火葬場の炉と祭壇を同一視することを前提としており、反ユダヤ主義的な色合いを担う語である (AU, pp.32-37)。ゆえに、本論ではショアーと記述することを選択した。

ii virtuality : 仮想現実 (virtual reality) とは関係がない。

iii プリモ・レーヴィ : 1919 年イタリア生まれ、1944 年 4 月にアウシュヴィッツ収容所に捕囚され、45 年に解放される。戦後は化学者でありながら、収容体験を『これが人間か』(1947) に著した (AU, p15)。